

全科協ニュース

URL <http://jcs.m.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9857 Fax.5814-9898 平成17年5月1日発行（通巻第202号）

平成16年度全科協海外科学系博物館視察研修報告

I. 管理・運営

1. パリ自然史博物館

パリ自然史博物館は植物公園内にある1793年設立の歴史ある博物館である。同博物館はテーマ別に館が分かれており、今回は、動物園、鉱物学棟、古生物学棟及び進化陳列棟を視察した。

動物園は、おそらく世界初の動物園であり、絶滅危険種の保存も目的のひとつとしている。入園料は無料であり、大半が学童。

鉱物学棟はフランス初の鉱物博物館である。スタッフ数は3名で会計等の事務に関しては別組織が行っている。照明が極端に弱いことから、展示よりも標本保存に力を入れているように思われた。入館者数は年々減少傾向にあり、フランス国内で鉱物学を学べる場が少ないという点が要因のひとつとしてあげられる。

古生物学棟に展示されている大半が本物の化石標本である。1Fは主に現世生物の標本を展示、2Fは原生生物及び恐竜の化石が展示してある。研究員数は約60名。展示場というよりもむしろ収蔵庫的な印象を受けた。

進化陳列棟は、同博物館の主要施設であり年間入場者数80万人の内50万人が同施設の入場者となっている。総敷地面積は6,000㎡でコレクション数は実に6,000万点を数える。内タイプ標本は80~100万点ある。収蔵室は気温15℃、湿度55%に調整されておりセキュリティーシステムで一括管理している。

パリ自然史博物館ではパリ市内にある自然史系博物館、動物園及び植物園等の管理も行っており、地球の歴史、海洋生物、エコロジー他7部門ごとにディレクターをおき、それぞれ図書部門、コレクション部門に分けられている。

同博物館においては、館内を安全に閲覧出来る人数(1,500



パリ自然史博物館

人)を設定している一方、特に目標入館者数や入館者数を伸ばす施策を設けていない点が印象的であった。

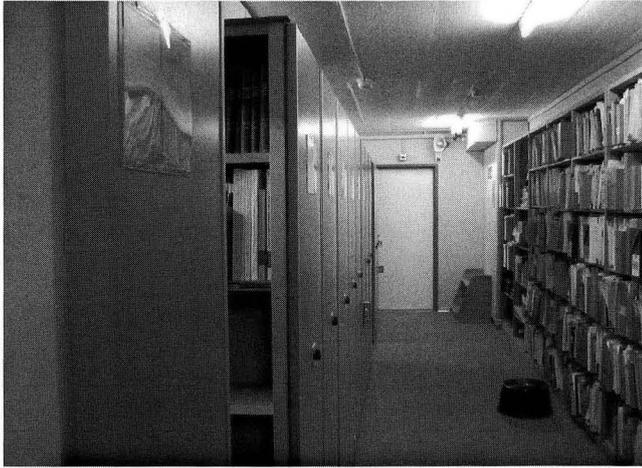
2. ジュネーブ自然史博物館

ジュネーブ市内にある市立の博物館であり設立は1820年と歴史がある。現在の施設は1962年に建てられたものである。年間入場者数は約20万人。恐竜展を開催した時は60万人の入館者数を数えた。ジュネーブ市の人口が17万人で州が40万人なので、この入館者数は非常に多いと思われる。

常勤職員が102名で内24名が研究職に就いている。その他20名前後のパート職員がいる。年間予算は1,360万フラン(約13億)ほぼ毎年同額の前算が支給されるが70%近くが人件費にあてられている。

ターゲット層はジュネーブ内外の一般人、学生、フランス人、ローザンヌ地方からの観光者等非常に広い。入館料は無料である為、広告にかかる費用年間7万フランは予算から全て捻出している。

注目すべきは広告の為のポスター、館内で使用するパンフレット等の作成、教育教材、レプリカ作成など全て館内のアトリエで製作している点である。館内清掃なども職員が行っており、これら一連の業務の外注は、現在のところ



ジュネーブ自然史博物館

指示も方針もないとのこと。

同博物館においては高学年の児童に対する教育プログラムが用意されていない為、13歳以上の子供の来館者が少なく、今後解決したい問題点のひとつとなっている。

3. ドイツ博物館

ミュンヘンにある科学系博物館で1903年に基本構想を完成、1925年から一般公開された。展示場、図書・事務棟、フォーラム会場の3つの建物からなり、フォーラム会場は現在、別経営されている。体験型展示品が多数あり展示場の総面積は実に50,000m²を超える。

380名の職員と120名のボランティアによって運営されており、館長の上に管理委員会が存在している。年間総予算は約3億ユーロ。

館内にはワークショップが存在し18の作業場がある。作業場ごとに製作するものが割り当てられており、そこで展示品となるレプリカの製作、収蔵品の修理、パンフレットの作成、公開されていない絵画の修復等が行われている。

5年～10年間隔で入館者の構造分析を行っており、入館者の年齢層、居住地域、海外からの入館者数（18%が海外からの入館者）の統計をとり、館の運営に取り込んでいる。

またアンケート調査等により来館者の意見を取り入れ、2年前に3～8歳未満の幼児を対象とした「子供の国」コーナーを新設。これまで来館者の4%に過ぎなかった為対象外とされてきた来館者層であったが、幼児に対する自然科学の有用性がディスカッションされた結果、館の回答として同コーナーを設立した。成人の単独入場は不可、常時2名の係員がいる等、セキュリティ面も重要視している。

同館の今後の課題としては、10歳未満の子供に対する展示を増やしたい、女性への普及活動を行いたい、高齢化社



ドイツ博物館

会に対応した展示普及を行いたい等であるが、女性による女性限定のガイドツアーを実施するなど、館の今後を見据えたデータの収集、収集した情報の分析、対応した事象の実践が組織的に行われている点が印象的であった。

国立科学博物館 関根 則幸

II. 展 示

【ジュネーブ自然史博物館】

当館は1820年に設置、その後1965年に現在地に移転し今に至るジュネーブ市立の博物館である。職員は102名（その他に学生等20名）、うち24名が研究者、考古学、鉱物学、動物学など8つの研究部門とアトリエを持ち、アトリエには2名のデザイナーを含む技術者が従事、展示物の製作・補修から写真撮影、印刷まで館内で行うことができる。

展示室は5層、1階「地域動物」、2階は海外の「鳥類」「哺乳類」、3階「両生類」「爬虫類」「魚類」、4階「地質学」「古生物学」「太陽系」、5階「スイスの地質学」「特別展示」で構成される。展示および収集資料はスイス国内を越え国際都市ジュネーブらしく全世界に及んでいる。

展示の特徴として以下の点が挙げられる。

- ① 膨大な剥製とレプリカ資料が展示の中心。
- ② パネルや映像による解説が少ない。
- ③ ハンズオン等参加体験展示はほとんどない。
- ④ 展示ディスプレイはカラフルでアート性が高い。
- ⑤ 室内照度を落とし効果的な照明演出。

全長2kmの展示ケースに資料が並び、一部吹き抜けのジオラマ展示もあるが、基本的に「資料」を「ケース」でみせるいわゆる従来型の博物館である。映像やハンズオン等の参加体験展示が少ないことが、展示に興味のうすい来館

者にとっては退屈ではと思われがちだが、④と⑤の特徴がそれを補って見事に展示へと惹きつけている。

展示室に入るとやや暗い空間とは対照的にオレンジ、黄色、緑といったカラフルな展示ケースが並び、来館者を非日常的な体験へ誘う。個々のケース内ディスプレイも単に資料を陳列する、あるいは正確に情景再現をするという手法ではなく、色、素材、形状、配置、照明を工夫し、非常にアート性の高いものになっている。

資料の環境とはほど遠いカラフルな色づかいは日本では敬遠されがちだが、色、素材、形状を時に対比させながらも資料を生き生きと際立たせ来館者の想像力を喚起する。単純化した展示の妙である。これら展示ディスプレイが独創的で変化に富んでいるため来館者は全長2kmに及ぶケース展示でも、リズムカルに、飽きることなく鑑賞できる。またパネルや映像による解説が少ないことが逆に実物資料の持つ情報訴求力を高めている。安易な映像解説の多用は来館者の自由な足を止めるだけでなく、家庭TV等の見聞き慣れたマスメディアを想起させ、博物館という知的・非日常体験を損なうことに改めて気づかされる。高いデザインコードで構成された当館では、映像を解説ではなく、剥製からは読みとりにくい「生き物」の力強さを補足する素材（ナレーションなしの生態観察映像）として活用している。このように来館者を惹きつける独創的な展示を必要に応じて開発できる背景として、館内のアトリエ、そして専任デザイナーの常駐が大きい。

当館の展示、そして展示を支える組織構成はディスプレイデザインの原点を感じさせる。設備的、費用的に大きな展示更新ができないという博物館は少なくないが、「金と最新技術」ではなく学芸員や展示事業者の「創意と誇り」が日本のディスプレイデザインの可能性を高めることを示唆している。

鳥取県立博物館 清末 幸久

(株)丹青社 吉田清一郎

(株)トータルメディア開発研究所 矢部 大智

【フランス 国立自然史〈進化〉博物館】

1月19日パリでこの研修の最初の公式訪問館である国立自然史〈進化〉博物館を訪れました。国立自然史博物館は、実は広大な植物園の敷地の中にいくつものテーマの博物館が設置されています。動物園や鉱物博物館、比較解剖学と古生物のギャラリーなどがあり、これらを簡単に見るだけ

でも午前中かかりました。午後から待望の「la Grande Galerie de l'Évolution」「進化の博物館（グランドギャラリー）」です。

入り口を抜けるといろいろな海の生き物の標本や巨大な鯨の骨格標本などが演出照明や映像により効果的に展示されています。奥には階段があり、2階のフロア一杯に圧倒的な動物たちの剥製の行進が展示されています。その姿はまるで生きていますのごとく躍動感に溢れています。驚くのはこの展示がガラスや手摺柵を設けていないことです。館内パトロールの人がいますが、ガラスで仕切られていないことで実際の動物の大きさや質感がリアルに伝わってきます。日本では保安上考えられないことです。この階から3層分の吹き抜けになっている館内では回りの壁面で各フロアごとに種の多様性や進化についての解説がされています。最上階で子キリンがこちらをのぞいており2階の親キリン？と呼び合っているような和む演出もされていました。展示館全体にいえることでしたが吹き抜けの天井からの自然光以外は照明は押さえ気味で、各階の壁面展示は解説が少々見づらい印象を受けました。これは標本を保護するためと落ち着いた雰囲気作りを意図したものとのことです。確かにグラフィックや標本はきれいに見えますが、見えにくい人もいます。しかし、それを差し引いても、ここは館全体が一つの意思を持って見る人に語りかけてくるような迫力があります。それは、テーマを意識した建築やデザインがきちんと調和しているからだと感じました。

この博物館は前身の施設が大戦で破壊された後長い間休館していたそうですが、10年前に数年間の改装期間を経て進化博物館として再開館しました。そのときに建築家と研究員たちが協議を重ねてテーマや建築・展示デザインを決



フランス国立自然史〈進化〉博物館

めていったそうです。日本の博物館でも最近では展示と建築が構想段階からコラボレートされて考えられることが多くなってきましたが、この展示を見たことで改めて非常に大事なことと感じました。

さらに驚くべきことは、今回私たちが特別にこの博物館のバックヤードを見学させていただいた時です。そこで見たものは館内で見た標本を遙かにしのぐ、フランス人口と同じ6,000万体に及ぶ大量の標本たちの一部でした。それらは館の地下の3,000m²の収蔵庫「ゾーテック」に保存されており、実は博物館を作る前の段階でここを整備したそうです。収蔵品は絶滅種の保存にも力を入れており、もう見られなくなった種もここに多数保存されています。博物館にとって展示として見せることも大事ですが、種の保存や自然科学についての調査研究も本当に重要な作業なのだと考えさせられました。

(株)乃村工藝社 堤 雄一郎
水野 考基

【ドイツ博物館】

ドイツ博物館は、科学史と技術の歴史及び自然科学を実物、絵画、模型で展示し、また、職員がデモンストレーションをしたりするという動的な展示方法を導入しハンズオンを主とした幅広い分野を網羅している館である。

来館者は直接展示物に触れる事ができ、また、ボタンで機械を操作出来るようになっている。実際にそのものを使って体験するという展示方法ではないが、直に触れ観察できるという点はすばらしく思われた。また、各展示コーナーで決まった時間にデモンストレーションがあるという点も来館者に自然史や科学という分野に関心を抱かせるとても重要な役割を担っているように思われた。

数ある展示の中でも特に子供向けのコーナーである『子供の国』は、そのハンズオンの発展系とも言えるのではないだろうか。体を使い自分でそのものを動かし考えるという展示物が多く、子供達が直に科学に触れられるきっかけを積極的に取り入れるという実に理想的なものであった。多感な幼い時期にそういう場があり体験出来るということは大きな財産になるのではないだろうか。また、子供向けばかりではなく年配向けの展示も考えているとのことであった。

展示に関する考え方、展示方法（目線の高さや段差、解説文）、これからの展示のあり方として大いに参考になった。

色々な事を見聞き出来、大変良い勉強になった。

むつ科学技術館 北村 綾之

【ドイツ博物館】～科学「技術」をみせる～

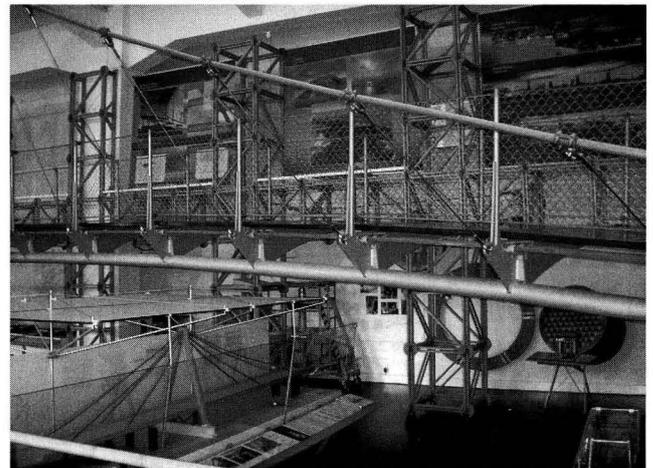
歴史と本物による圧倒的な迫力で迎えてくれる。

展示面積は4.7万m²、50を越えるコーナーがあり、20世紀初頭、開館当初からの基本構想は「自然科学と技術の発達を展示する」である。世界に先駆けて体験型展示を導入した博物館であるが、特に、「技術」をみせる手法について述べてみたい。

小中規模の館であれば「完成品」を見せるだけで精一杯であるが、ここでは「技術」をみせるために、①「触れる距離にある本物」・②「見える技術史」・③「理論・実験（体験）装置」の3点が各コーナーで徹底されている。

例えば、「橋梁技術」コーナーであれば、「①巨大な橋を建て、その横に②時系列に沿って技術（作業）をジオラマ等で再現し、③実際にブロックでアーチ橋を作ってみる・水流を調べてみる体験をする」ことで構成されている。解説についても、文字情報だけでなく、本物のパーツやモデルが添えられ思考・理解を助けている。

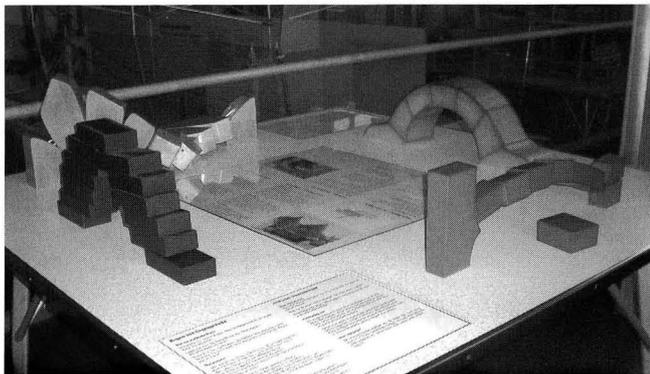
オーソドックスな手法であるとも言えるが、世界に先駆



巨大橋



ジオラマ



実 験

け、しかも、鉄道・飛行機・高圧電流技術等々、徹底した展示は高く評価されるべきことである。

当館では、入館者数増との兼ね合いもあって、アミューズメント性を加味した展示を模索しているが、ここではそういう意図を感じることはなかった。しかし、2003年にオープンした「子どもの国」コーナーが業績を上げているとのことであり、ここには巨大ギターやブロックプール等、参加・体験性の高い物が数多く置かれていた。また、3～10才の子ども向け展示や高齢者への対応が課題とのことである。国民性や子どもの実態、館の使命等の違いはあるものの、共通点も多く、時代・ニーズに応じた展示の必要性を強く感じた。

福岡県青少年科学館 岡 撰

III. 教育活動

【ジュネーブ自然史博物館】

<http://www.ville-ge.ch/musinfo/mhng/>

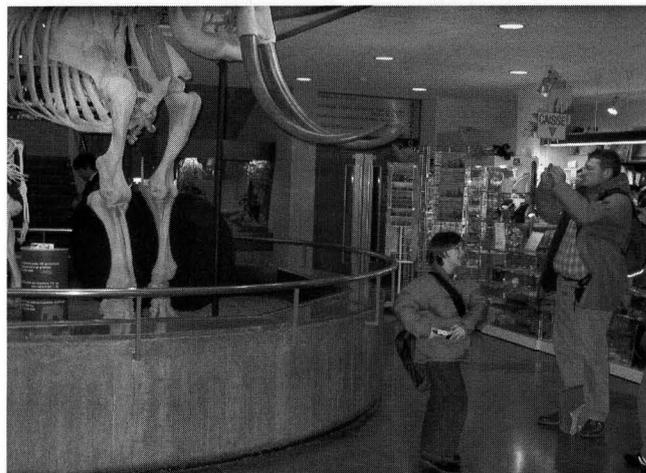
ジュネーブ州内の小学校の社会見学プログラムにはほとんどのほとんどの学校が参加しており、6才から12才までの小学生だけをとると年間300クラスが、ジュネーブ州の近郊を含めると3,000クラス程度の利用があるとの説明があったが、その説明通り、充実したプログラムをもっていると感心させられた。

館内に職員として教育者が2人おり、毎年新しい学習プログラムを3～4作っているそうである。最初の説明時にプログラムに沿った教材が冊子として何種類か配られていたが、館内の図書室に案内されたときには、たくさんの教材冊子を目にする事ができた。

学校のプログラムに合わせて館のプログラムも作られているそうである。プログラムは、地元レマン湖の太古からの歴史に関するものや、人体に関するもの、生物に関する

ものなど小・中・高校生が社会科や理科の学習をした後に、発展的な教材として使えるように工夫されたものであった。

実際に館内に見学に来ていた小中学生が、冊子を手に持ち、館内の展示を見て回りながら答えを見つけていくといった学習を行う姿を目にすることができた。このほかにも、水曜日や土曜日、日曜日には特別プログラムとして、専門家の話を直接聞けるといった内容のものも用意されているそうである。また、学生グループを対象として、ガイド付きの訪問も行っているとのことであった。



ジュネーブ自然史博物館

こういった教育プログラムを組んでいることから、いつ生徒が学習に来てでも対応できるようにするため、常設展の内容はあまり変えないようにしているそうである。また、州内の各学校が教育計画を立てるのに合わせて、教育プログラムの案内を送るなど、集客増に向けての取り組みも行われているとのことであった。

今後の取り組みとして、近郊の町や州にもプログラムを広げていくことや、2才～4才までの幼児向けに、環境問題についてのプログラムを作っていくようにしているとのことであった。

北九州市立児童文化科学館 松本 喜義

【パリ国立自然史博物館】

<http://www.mnhn.fr/>

国立自然史博物館は、進化のグランドギャラリー（動物学コレクションを収蔵）、鉱物学ギャラリー、古生物学・比較解剖学ギャラリー、動物園、植物園等、複数の博物館園で構成されているが、教育活動に最も力を入れているのは1994年に開設した「進化のグランドギャラリー」である。

進化のグランドギャラリーには、主に青少年向けの教育活動エリア（約1,000㎡）があり、ディスカバリー・ルーム



グランドギャラリー

と2つの実験室（ラボラトリー）が設けられている。ディスプレイ・ルームは1階（日本でいう2階）にあり、5～12歳の子どもの対象に、展示テーマである「進化」の過程を理解する上で基本となる「時間と種」の概念を子どもたちに親しませることを目的としてつくられた。ここには4つのサブ・エリアがあるが、その中の一つ「時間と生命」には、時間の塔と呼ばれる階段があり、階段を上ると生物の進化の過程が現在から過去へとさかのぼって紹介されている。ここで子どもたちは、化石や模型の展示を見たり、参加型の活動を楽しみながら、地球上の生命が誕生した40億年前までの生命の歴史を体験することができる。

この「時間の塔」を上ると、2階には実験室がある。実験室は予約制で、9～13歳と14～18歳のグループを受け入れている。ここでは、博物館の研究者から最近の研究成果等について説明を聞いたり、実際に自分達で科学実験を行うことができる。また、視覚障害者向けの触れる標本模型等もここに収められているとのことである。

学校との連携については、パリ市内を中心に、EU諸国の学校との連携を図っており、実際に多くの学校団体が来館している。具体的な利用者数については直接うかがえなかったが、2000年当時のデータによると、グランドギャラリーだけで年間8～10万人の子ども達が学校団体として訪れているとのことである。

グランドギャラリー以外に視察した博物館については、動物園では、入園者（約40万人）の1割程度が幼稚園から高校生までの子どもである。一方、鉱物学ギャラリー、古生物学・比較解剖学ギャラリーは、学校で教えることの少ない専門分野ということもあり、子どもの来館は少ないとのこと、館によって教育活動での利用の実態にはかなり

差がある様子がうかがえた。

そのほか、一般来館者への教育普及活動として、常設展示のガイドツアーや関連イベントを随時実施しており、週末には家族や子ども向けのプログラム、専門家を招聘しての討論会等も催しているとのことである。

榎丹青研究所 庄司 麻美

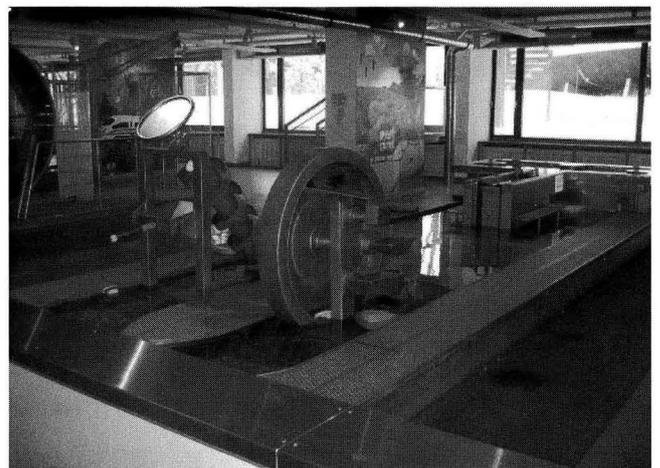
【ドイツ博物館および自動車館分館】

館の設立構想がなされた1903年から「本物」を主展示として、資料と来館者とをより深く繋ぐ「体験型」を目指してきた。ミュンヘン総合大学で博物館学等の講義もする Prof. Teichmann 氏には普及活動や来館者の構造分析、Dr. Freymann 氏には管理運営と展示コンセプト、Dr. Kernbach 氏には Kids' Kingdom を例に児童への普及活動、Dr. Haar 氏には自動車館分館について解説して頂いた。

年間入館者は約150万人で、その4%が6歳未満の幼児であり年々増加している。入館者層や地域を調査し、ターゲットに合わせた普及活動を目指しているので特徴ある事例を記す。

テキスト教材類の充実。3～10才向けに学校カリキュラムに準じたワークシートが約30種類あり授業にも利用されており、それらを授業で使用している教員の約2割は独自に加筆工夫して利用している。16～18才向けには宇宙や錬金術等の展示を生かした内容の小冊子も活用している。日本と同様に中高生の来館者は少なく、「科学以外にも興味関心がある時期であるからやむを得ない」と考えられている。

児童への対応。2003年には3～8才児（保護者含）のみが入場可能な Kids' Kingdom と題したプレイルームを開設した。「自然科学や数学は幼い時に影響を与えた方がより好印象を与えるであろう」という職員皆の意見によって開



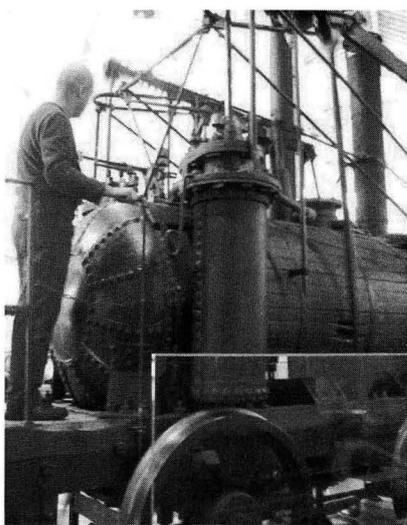
Kids' Kingdom

設された。視覚・聴覚・触覚を知的に刺激する展示装置が設置され、とても人気がある。本館の展示や解説は6才以下の子どものには難しく、これまで対象として考慮していなかったため、ここでは楽しく遊びながら科学知識の一端に触れることができるようにしている。

ガイドツアーや研修プログラムの充実。ガイドツアーは定期的に実施されていて、これらのプログラム数は約30種あり、博物館学や展示学の講義、教師の研修や「青少年プログラム」という学生向けの集中講座もある。なお館内には120人のボランティアがいて、各展示で解説をしてくれる。

次に分館の「自動車館」について報告する。現在は一部完成した1棟にて開館している(2006年6月に全3棟開館予定)。館の総合テーマは「MOVING」で、二足歩行から機械移動について「HISTORY」「TRANSPORTATION」「URBAN」をコンセプトに構成している。オープンスペースの室内に少人数スタッフであるため「スタッフの顔が見える館」という好印象を受けた。その特徴を三つ挙げる。

解説の充実。個別のキャプション(独・英)はもとより、



自動車館

写真や資料付きのファイル型解説シートが用意されていて、実演やガイドツアー、講座教室など、スタッフによる補足説明も充実していた。

児童向けコーナー。「体験コーナー」と「工作スペース」があり、前者は道路風の床で部品や模型を使って自動車の仕組みや交通ルールを教えたり、ペダルカーで遊ぶこともできる。後者ではトイブロックの材料を用意して自由に工作できる。優秀作品を写真で紹介するなど参加者のやる気と満足度を高め、リピーター効果を促している。

地域密着の姿勢。BMWや地元企業による特設展示や講堂での交流会も実施するなど、館のスポンサー作りにも積極的である。近隣には若年ファミリー層の住宅が多数あり、入館料も安く小学生以下は無料のため親子で来館する傾向があり、コミュニティーの場としても利用されている。国立だが地域交流の場として「開かれた博物館」でもある。

最後に、ドイツ博物館は各種の調査・検討によって、現展示等の弱点と目指すべき普及活動を明確に捉えるために「人々は館に何を求めているか」「館に何が必要か」自問自答しながら活動を展開していることが伺えた。またその内容は大変参考になり有意義な研修となった。

ドイツ博物館の今後の目標は次の通り。

1. 10才以下や高齢者を対象にした展示の開発および充実
2. 大学の教官と大学生以外の児童・生徒との出会いや教育の場にする
3. 科学や技術について、女性にも興味を抱いてもらえる啓発活動

出雲科学館 中山 慎也
トヨタ博物館 宗沢 清美

美術

はく製

〈各種生物〉
剥製・骨格標本・レプリカ
加工/販売/リース



有限 東洋近代美術研究所
会社

製作所 〒272-0816 ☎047-337-5678
千葉県市川市本北方2-18-1 FAX 047-338-1978

本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 ☎047-374-1564

E-mail:toyobken@taupe.plala.or.jp

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。

株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡

URL <http://www.tanseisha.co.jp>

ト兄弟の「フライヤー号」やリンドバーグの「スピリットオブセントルイス号」やアポロ11号の司令船「コロンビア」とともに、本館（ナショナル・モール・ビルディング）で2005年8月末から見られることになる。

SpaceShipOne.

<http://www.nasm.si.edu/>

オーストラリア博物館、絶滅のタスマニアタイガーのクローン実験の継続を断念

1936年の死亡を最後に絶滅が確認された肉食の有袋動物タスマニアタイガーのDNAを複製してよみがえらせるプロジェクトを進めていたオーストラリア博物館（シドニー）は、2005年2月14日に開いた記者会見で、このプロジェクトの断念を発表した。その理由として、採取したDNAに問題があったということだ。

1866年以来ホルムアルデヒド固定液の中で保存されてきたタスマニアタイガーの標本からDNAの断片を取り出す研究は、同館において1999年から進められ、いったんは2002年6月10日にその複製に成功したと発表している。

しかし、その後さらに研究を進めた結果、今回のような結論に達し、「DNAは劣化しすぎており、遺伝子ライブラリーを組み立てることができないことが分かった」と指摘。さらに「ライブラリーの組み立てに成功しても、細胞培養が必要な次の段階に進むための施設や技術がない」としている。

Australian Museum.

<http://www.austmus.gov.au/>

米アトランタのコカコーラ博物館、2007年春に新装開館

現在の中国では、初期の風邪を直すのに温めたコカコーラを飲むことが一般的だ。ところによっては北朝鮮と隣接する地域のように、北朝鮮産のチョウセンニンジンとショウガをおろしたものをコーラに加え、漢方薬の葛根湯と一緒に飲むそう。まったく奇妙な組み合わせだが、疑心暗鬼で、手に入らないチョウセンニンジン無しで試してみたところ、これが効くのだ！

そのコカコーラだが、米国アトランタにあるコカコーラ博物館が、現在の規模を2倍に拡張されて、2007年春に新装オープンする。96,400,000ドルの総工費に対して、地元アトランタも地域産業の活性化を目的に、総額8,000,000ドルの助成をすることが決まった。この公的資金の投入は、駐車場の整備、新博物館周辺の景観整備、正面入口付近の広

場の整備に使われることになっている。

World of Coca-Cola.

<http://www2.coca-cola.com/heritage/world-cocacola.html>

中国・揚州の博物館建設ブーム

「春風駘蕩」という言葉がある。この言葉を中国のみならず世界で最も似合う都市は揚州だと、多くの中国人は豪語している。訪れてみると、確かに「然もありなん」である。

その揚州に、政府の全面的な支援を受けて、10館の博物館施設が3年以内に完成されるようだ。中国の伝統医学の歴史を紹介する博物館をはじめ、有名な揚州の運河をテーマにした運河文化展示館や橋の専門博物館である大橋記念館博物館、瘦西湖動物標本館、揚州料理博物館、揚州流盆裁の博物館等のユニークな博物館に加え、揚州仏教文化博物館、揚州工業博物館と工芸展覧館ができる。揚州は過去3年の間に、政府の支援を受けて、市内に残る多くの古い仏教寺院や個人の古い邸宅の修復を手がけており、その多くが観光の名所として公開されている。

インドの珍しい博物館：マドゥライの「蚊」の博物館

南インドの内陸部の都市マドゥライ（タミルナドゥ州）に、「蚊」の専門博物館がある。国立病毒媒介昆虫研究センター（Vector Control Research Centre）に属する同館ではインドで棲息する200種の蚊の標本が収集されており、これらは1985年から1996年までの間に、タミルナドゥ州、ケララ州とカルナタカ州にまたがる広範囲な地域で採集されたものだ。同館は、インドにおける蚊の研究センターとして機能しているばかりでなく、南インドの保健衛生関係機関に対して、蚊が媒介するマラリア等の伝染病の流行に関する情報を提供するセンターとしても機能している。

世界には3000種を超える蚊が棲息しており、そのうちの350種がインドに棲んでいる。さらに、マラリア、フィラリア症とデング熱を媒介するネッタイシマカ、ヒトスジシマカ、イエカとヤブカの4種については、南インドにおいて危険な蚊として認定されており、同館でもこれらの研究に力が入れている。

Mosquito Museum. Madurai.

<http://www.pon.nic.in/fil-free/vcrc/da5.html>

* (やすい・りょう) E-post: RGYasui@obirin.ac.jp

5月6月の特別展

開催館	展覧会名	開催期間
岩手県立博物館	テーマ展「えみし」社会の誕生	3月2日～5月5日
	テーマ展「岩手の実業家 金田一勝定・国士～銀行・電気・鉄道・花巻温泉～」	5月21日～7月3日
秋田県立博物館	企画展「風ひかる棚田」	4月23日～7月10日
山形県立博物館	館蔵品展「おまけになった生き物」	4月30日～6月12日
郡山市ふれあい科学館	企画展「星座物語」	4月1日～6月30日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	第33回企画展「Yakuso-野山は自然のくすりばこー」	3月19日～6月19日
栃木県立博物館	企画展「レッドデータブックとちぎー栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動植物ー」	4月29日～6月26日
群馬県立自然史博物館	特別展「アフリカの風」～小倉寛太郎サファリ3000日～	3月19日～5月8日
狭山市立博物館	企画展「現代京都画壇による源氏物語絵展～時代（とき）を超える王朝浪漫～」	3月12日～6月12日
千葉県立中央博物館	春の展示「春だ！野に出ようー自然観察入門ー」	3月12日～5月15日
千葉県立現代産業科学館	平成16年度千葉県立美術館・博物館合同企画事業 企画展示「竹」なが～いともだち	3月12日～5月8日
東金子ども科学館	巡回展「ナノテクノロジー解説展示装置ーナノの冒険ー」	4月3日～10月30日
交通博物館	特別展「東京駅開業90周年記念～東京のターミナル形成史」	2月8日～5月29日
科学技術館	特別展「万華鏡工作・作品展」	5月3日～5月5日
国立科学博物館	特別展「恐竜博2005ー恐竜から鳥への進化ー」	3月19日～7月3日
機械産業記念館（TEPIA）	第17回展示 Part III「e-ライブ展～生活産業の新技術」	4月8日～7月22日
たばこと塩の博物館	企画展「浮世絵で楽しむ江戸の旅～東海道宿場めぐり～」	4月23日～5月22日
三菱みなとみらい技術館	特別展示「見つめよう！わたしたちの地球」展	3月15日～9月25日
馬の博物館	春季特別展「はにわうま」	4月23日～6月5日
横浜子ども科学館	企画展「器用にできるかな？」	4月29日～6月19日
横須賀市自然・人文博物館	企画展示「中国大陸の蝶」	2月11日～5月29日
神奈川県立生命の星・地球博物館	企画展「収蔵資料展」	4月29日～5月29日
	佐伯邦夫写真展「雪・美しき」	5月2日～5月22日
黒部市吉田科学館	特別展「北前船一次郎吉物語」	6月4日～9月4日
	特集展示「花と昆虫」	4月10日～6月12日
富山市科学文化センター	ミニ企画展「とびだせ宇宙へ！～宇宙を見よう！宇宙へ行こう！～」	5月21日～7月10日
飯田市美術博物館	寄贈記念特別陳列展「飯田つむぎのころー広瀬忠一の織物ー」	6月23日～7月18日
	特別陳列展「原人がいた頃のシカ」	6月28日～8月18日
岐阜県博物館	資料紹介展「ようこそ 昆虫の世界へ！」	4月23日～6月26日
中津川市鉱物博物館	私の展示室「トリバネチョウー世界三大美蝶ー」	4月17日～7月10日
東海大学海洋科学博物館	特別企画「屋台水族館」	4月29日～5月5日
豊橋市自然史博物館	愛知万博開催記念「5300年前から来た男～アイスマン展」	4月19日～5月8日
	収蔵資料紹介展「森部一雄氏寄贈貝類コレクション」	5月28日～7月3日
名古屋市科学館	特別展「庶民の算術展～世界がびっくり！絵馬に見る最強の謎解きパワー」	4月29日～6月26日

開 催 館	展 覧 会 名	開催期間
トヨタ博物館	企画展「人がクルマに恋した世紀—トヨタ博物館の秘蔵展」	3月15日～9月25日
鳥羽水族館	50周年特別パネル展「鳥羽水族館の50年」	5月15日～12月31日
滋賀県立琵琶湖博物館	ギャラリー展示「淡海の川—水害、そして川とともに生きる」	4月23日～6月26日
兵庫県立人と自然の博物館	企画展「神戸の植物化石」	3月12日～6月12日
姫路科学館	企画展「道具とおもちゃのしくみ展」	4月28日～5月29日
	作品展「日本の自然写真展」	6月18日～7月3日
橿原市昆虫館	第16回企画展「チョウのはねの不思議」～藤森信一コレクション公開～	3月15日～5月15日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「みんなで作る自然の展示会」	4月26日～6月12日
	特別陳列「高山植物写真展」	6月25日～8月21日
吉備高原ニューサイエンス館	20周年記念特別展「ASIMOショー」	5月3日～5月8日
防府市青少年科学館	企画展「モンゴルの恐竜化石」	4月22日～6月5日
	「未来の科学の夢絵画展」	6月18日～7月3日
山口県立山口博物館	テーマ展「世界のチョウ・日本のチョウ」	4月26日～5月29日
あすたむらんど徳島 子ども科学館	特別企画「サイエンスパーク」	4月29日～5月8日
愛媛県立博物館	テーマ展「愛媛各地の岩石」	4月1日～5月25日
	テーマ展「石鎚山に咲く花」	6月1日～7月27日
愛媛県総合科学博物館	企画展「別子銅山写真展～日和佐初太郎のレンズが語る懐かしき時代～」	3月5日～5月15日
福岡県青少年科学館	企画展「音戯（おとぎ）の世界」～音とあそぼう！音を楽しもう！～	4月16日～5月15日
宮崎県総合博物館	企画展「都城島津家の歴史と名宝」	4月23日～5月15日
	特別展「中国の遺宝 大唐王朝 女性の美」展	6月11日～7月31日
沖縄県立博物館	パネル展「博物館を知ろう」	5月10日～5月22日

【新展示】

浜松科学館

【新コーナー】 宇宙のコーナー

【新展示物】 「浜松宇宙ステーション」



【展示面積】 2.5m²

【公開日】 平成17年3月9日

【準備期間(基本設計・実施設計・施工期間等)】 1年

【担当業者】 設計・(株)環境デザイン研究所

施工・(株)乃村工芸社

【総工費】 24,700,000円

お 知 ら せ

○平成17年度全国科学系博物館等における地域子ども教室推進事業について

平成16年度より始まりました文部科学省の委託事業である「地域子ども教室推進事業」について、17年度も国立科学博物館が運営協議会を組織し、科学系博物館等のとりまとめに当たることとなりました。全科協としても昨年度に引き続き協力することとし、今年度は加盟館のうち47館がこの事業を行う予定です。この事業についての詳細は下記までお問い合わせ願います。

【お問い合わせ先】

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課
全国科学系博物館等における地域子ども教室推進事業運営協議会

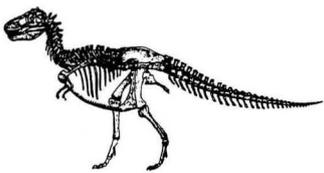
担当：齊藤、高山、上田

電話 03-5814-9864、9865、9853

文部科学省生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室

電話 03-6734-3260

※世界の化石・
 鉱物・恐竜・化石
 人類・動物骨格
 標本及び模型の
 輸入専門業者



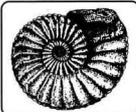
ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**
 コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
 TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



地学標本(化石・鉱物・岩石)
 古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

since 1974

●常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

髷東京サイエンス
 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
 TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745
<http://www.tokyo-science.co.jp> E-mail:info@tokyo-science.co.jp

「人が集う空間」
 という意味を、
 ノムラは
 いつもトータルで
 考えています。

集まる理由を、
 ノムラは
 知っています。



集客環境づくりの調査・コンサルティング、企画・デザイン、
 設計、制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

NOMURA <http://www.nomurakougei.co.jp>
 株式会社 乃村工芸社 本社:東京都港区芝浦4-6-4 電話03-3455-1171(代)

INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT
ONY KOBO CO.,LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
 TEL.(03)3221-1102(代) FAX.(03)3221-1185



動物園/水族館/博物館
 企画・設計・施工

高品質表現力

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工

kokoro

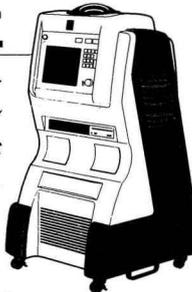
株式会社 **ココ**

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
 TEL:042-530-3939 FAX:042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム
メディアグローブ、誕生

メディアグローブは世界で初めてフルカラー
 投射を可能にした小型・高精細のデジタル
 プラネタリウム。さらにドーム全天に高画質な
 CG映像を投射するマルチ投射機能を持ち、
 さまざまなシーンで活躍します。

▶各種イベント等にも対応。レンタルもご相談ください。



コニカミナルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒163-0512 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル12階 TEL.(03)3349-5301
 大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階 TEL.(06)6110-0570
 東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町1-8 TEL.(0533)89-3570
 URL:<http://konicaminolta.jp/planetarium/>

○国立科学博物館の組織改編に伴い、4月1日より全科協事務局長の担当が変更になりました。

(新) 広報・サービス部 情報・サービス課 守井典子
 電話番号 03-5814-9863

(旧) 展示・情報部 情報サービス課 齊藤 健
 電話番号 03-5814-9857

*電話番号が変わっておりますので、お気をつけください。
 所在地、FAX番号については従来通りです。なお、平成18年度まで事務所の改修工事が予定されており、今後も電話番号が変更になる可能性があります。ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほど宜しくお願いいたします。

全科協ニュース編集委員会

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長

國府田良樹

川口市立科学館サイエンスワールド 学芸係 久保田耕平

千葉県立中央博物館 教育普及課長 森田利仁

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長 井上透

国立科学博物館 広報・サービス部 広報課専門職員 原田紀子

全科協事務局

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課 守井典子

Tel.03-5814-9863 Fax.03-5814-9898

発行日 平成17年5月1日

発行 全国科学博物館協議会©

☎110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社